

# オレゴン産シャクナゲを育てて7年

田端喜久二 中内武五郎

## はじめに

昭和39年11月11日、オレゴン州知事ほか29名が産業視察団として北海道を訪れるに際し、その土産としてもってきてくれたのがオレゴン産シャクナゲである。シャクナゲを土産としたいきさは前町村知事が渡米し、オレゴン州知事の家立に立寄った際、庭に赤、黄、白、紫など美しい花が咲いているのを見て、その美しさをほめたことにはじまり、このことから39年の来道のおり持参されることとなった。

## 7年間の経過

昭和39年11月12日、贈られたシャクナゲは知事公館より造林課にその栽培をまたされた。造林課では栽培の安全を期するため農林省林業試験場北海道支場に各品種1本計6本を配分し、残り54本は道立林業試験場で育成するようにとの指示をうけた。引き渡しの14日には両知事の記念植樹が標本館でおこなわれ、そのまま残りの54本を受領した。

受領したシャクナゲの取扱いは難かしく、その年のうちに寒害で18本が枯死し、温室内で残り36本を無事に越冬させることができた。春になって新芽も伸長し、当時30cm程度のシャクナゲも50cmぐらいになった。昭和42年春、待望の花をつけたジャソマリードモンターグはそれはみごとであった。

昭和42年気候順化のため畑に「むしろ」でかこいをして越冬を試みたところ葉が褐色となり全葉枯葉となっていた。寒さに弱いロードスホワイトなどは、寒害のため一部枯死した。枯れなかったものは樹勢回復までに数ヶ月を要した。

昭和43年、再び畑で越冬試験をおこなった。まず初冬に畑地のものを掘上げて樹幹部に丸太を枕にしてねかせ、雪の中に埋まるようにした(図1参照)。その結果、若干葉のいたみはあったが、全部無事越冬させることができた。

昭和45年6月4日、当場に各種2本宛を残して伊達町へ下記のとおり引渡し、翌日同町開拓記念館前庭に植栽された。

- |                  |     |
|------------------|-----|
| (1) ローズホワイト      | 3本  |
| (2) サッポー         | 15本 |
| (3) イグナチュースサーゼント | 10本 |

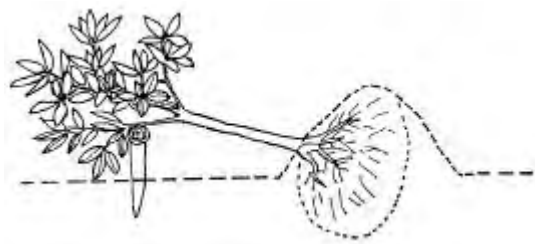


図 - 1 越冬伏臥

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| (4) ユニーク        | 8 本        |
| (5) ベティワームルド    | 5 本        |
| (6) ジャンマリドモンターグ | 7 本 計 48 本 |

伊達町では、その年の秋にファイロンハウスを建てその中で育成し、冬期間中でも暖房することなしに無事越冬し、春には美しい花を咲かせた。

その後当场では、残置したものの育成と昭和 44 年、45 年にさしきしたものの養成につとめた。

さしきして養成した苗木は強健で病虫害等による枯損もなく順調に生長して、現在(昭和 47 年 2 月)の成績は図 - 2 のとおりである。

## 6 品 種 の 特 性

### (1) ローダスホワイト (Loder's White)

葉は濃緑で楕円形、蕾はピンク、開花後に白くなる。発根性は弱、耐寒温度 0 ，開花は 4 月。

### (2) サッポー (Sappho)

葉は長楕円形で細長く、生長旺盛で樹高も高くなる。花は白に紫の斑あり。花のつきは多く、発根性は中、耐寒温度 - 5 。

### (3) イグナチユースサーゼソト (Ignatius Sargent)

葉は黄味を帯び楕円形、花は大輪のピンク、発根性は中、木は丈夫で寒さに強い。耐寒温度 - 25 。

### (4) ユニーク (Unique)

葉は小形で丸味を帯びた楕円形、分枝性は 6 種の中で最大、枝の伸びが少ないため樹形はまとまった形となる。花色は蕾のときはピンク色を呈し、開花後にレモン色となる。花は小論、発根性は中、耐寒温度 0 。

### (5) ベティワームルド (Betty Wormald)

葉は濃緑で楕円形、花は大輪のピンク、分枝性は大、発根性は中、耐寒温度 - 5 。

### (6) ジャンマリドモンターグ (Jean Marie de Montague)

葉は濃緑長楕円形、花色は深紅、萌芽、分枝、発根性は最も大、耐寒温度 0 。

## さしきによる増殖法

増殖については故横山八郎氏によりさしき、葉ざし、とりき、が試みられた。さしきは昭和 40 年 4 月 20 日、ポリハウスのなたで緑枝ざしを行った。さしき用土は鹿沼土 100%とし、ジフィーポットを使用してさしつけた。その年の 11 月 1 日掘り取り調査の結果、発根率は 41%であった。その後、昭和 44 年および 45 年には親木が大きくなり、さし穂用の緑枝が多量に採取可

能となったのでさしきをおこなった。その結果は表一 1 のとおりである。発根率は各樹種間において差があり、発根の良好なものは、ジャンマリードモンターグであり、発根率のわるいものはロードスホホワイト、ペティワ モルド、中庸なものはサッポー、イグナチユースサーゼント、ユニークであった。

表 1 さしきの成績

品 種	昭和 4 4 年			昭和 4 5 年		
	さしつけ	発根	発根率	さしつけ	発根	発根率
ロ ー ダ ス ホ ワ イ ト	4 本	1 本	2 5 %	2 7 本	5 本	1 9 %
サ ッ ポ ー	2 0	1 2	6 0	5 9	1 4	2 2
イグナチユースサーゼント	3 8	2 0	5 3	1 2 7	4 9	3 4
ユ ニ ー ク	6 4	4 1	6 4	7 1	1 4	2 0
ペ テ ィ ワ ー モ ル ド	1 6	5	2 7	3 8	7	1 6
ジャンマリードモンターグ	1 1	7	6 4	4 1	3 0	7 3
計	1 5 3	8 6	5 6	3 6 3	1 1 9	3 3

#### 昭和 4 4 年のさしき作業

(1) さしき月日 7月 24 日および 9月 9 日

(2) さしき用土 鹿沼土，箱 40cm ×60cm，高さ 10.5cm の大きさのものをを用い，2mm 目のふるいをとおして粉を除き、次に 6mm のふるいをとおし大きいものを箱の底部にしき、上部に細かいものを入れた。

(3) 場所 温室内

(4) さしき方法

##### i) 穂木採取

採取の時期は当年伸長した新梢が木化したときを見はからってその基部から剪定鋏で切りとり，バケツなどの器に水を入れ，それにつけておく。

##### ii) さしつけ

採取した穂木の葉を 5~6 枚を残して取除き，さし穂は 12cm を基準にしたが，これをえがたいものは 8cm までのものを使用した。キリダシを用いて切口を斜に削り，反対側から切りかえしを入れた。切口にルートソを塗付し案内棒を用いてさしつけた。さしつけたあとは穂の周囲を指でおしつけ，穂と土との間に空けきのないようにする。

##### iii) さしつけ後の管理

さしつけ床の温度は 20 以上になるようにしたが，夏季になると 38 にもなったことがある。さしつけだものが萎れないように，多めのかん水が必要である。そのために，自動かん水

装置で1日2回、2～3分間噴霧かん水した。

i) 発根後の移植

同年11月28日に発根状況を調査し、発根の良好なものは鉢に移植した。発根の少ないもの、発根していないものは、床に継続してさしつづけた。その後、翌45年3月10日、4月21日に調査した。発根状況はさしきの元に白い細根が密生し、7cm～10cm位に伸びていた。さしつけから移植までの期間は約9ヵ月を要した。発根済みのものは素焼の径12cmの長鉢に移植し、用土は水苔のみを用いて植え込んだ。発根したものの最初の移植に水苔を使用した方が、他の用土を用いたものよりも、好結果がえられた。

v) 植替え

鉢植えしたものはそのまま約1ヵ年を経過させ、翌春畑地に移植した。当場の畑地の土壌は埴壌土のため乾燥するとかたくなる。シャクナゲの根は細いので伸長を促すには土壌を柔らかくすることが望ましい。そこで火山砂とピートモスを混合したものを植穴に入れて植込んだ。基肥には1㎡当り油粕100g、過燐酸石灰25g、加里10g、堆肥1kgを施用した。

vi) 植付け後の管理

畑地に植替えたものは、寒冷紗の日覆いをし、晴天続きで乾燥したときにはかん水した。

病害予防のため、月に1～2回ボルドー液を散布した。虫害については、発生たびに防除をおこなった。施肥は月に1回、プラントフードの800倍液を1株あたり1ℓ程度施用した。10月14日、越冬のため鉢上げをした。鉢の用土はピートモス5、火山砂5の割合に混合したものを使用し、11月1日温室に入れた。

昭和45年のさしき作業

親木が大きくなりさしき用の緑枝が多量に採取可能となったので多数さしつけした。

- (1) さしき月日 4月8日と4月21日
- 2) さしき用土 昭和44年のさしつけと同じ。
- (3) 場所 昭和44年と同じ
- (4) さしき方法 同上
- (5) さしつけ後の管理 同上
- (6) 発根したものの調査と移植

同年10月15日、46年1月22日、1月29日に調査して移植した。

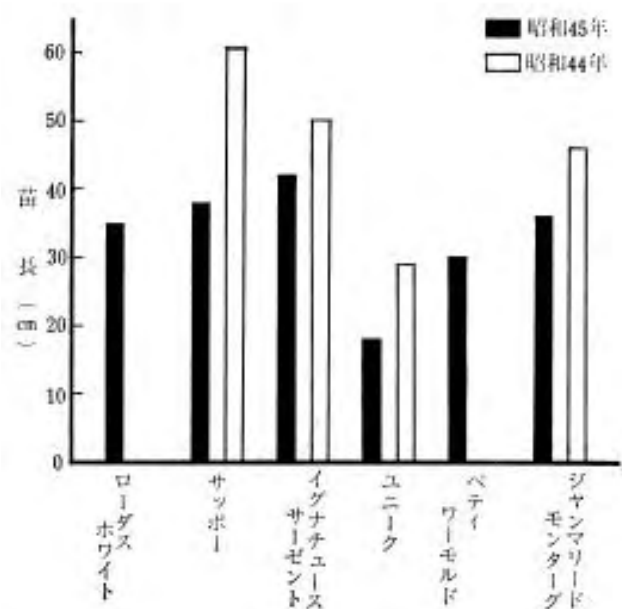


図 - 2 さしき苗の生長 (昭和46年末)

## さしきについての反省

(1) さし穂は緑枝さし、すなわち当年伸びた新梢を用いる。さしつけの時期は最も重要であり、新梢が木化し、新葉も硬化したときにおこなう。昭和44年、45年にさしつけ時期を2回に分けておこなった結果は表2のとおりであるが、いずれも後におこなったほうが好成績であった。

表 - 2 さしつけ時期別発根率の比較

品 種	昭和 44 年						昭和 45 年					
	7月24日			9月9日			4月8日			4月21日		
	さしつけ	発根	発根率	さしつけ	発根	発根率	さしつけ	発根	発根率	さしつけ	発根	発根率
ロードス ホワイト	本	本	%	4本	1本	25%	19本	1本	5%	8本	4本	50%
サ ッ ポ ー				20	12	60	22	3	14	37	11	30
イグナチユース サーゼント	16	3	19	22	17	77	25	4	16	102	45	44
ユ ニ ー ク	34	16	53	30	25	83	25	2	8	46	12	26
ベティワーム				16	5	31	20	0	0	18	7	37
ジャンマリード モンターグ	3	1	30	8	6	75	25	15	60	16	15	94
計	53	20		100	66		136	25		227	94	

(2) さしつけ場所は露地では困難であり、温室を必要とする。さしつけから発根し移植するまでの期間は7～9ヵ月を要する。発根に必要な温度は20℃位で、この温度を道内で露地で得られるのは5月から9月までの5ヵ月であるから、温室にたよらなければ困難である。

(3) アメリカ産のシャクナゲは、さしきによって発根が可能であるが容易ではない。発根までの期間も長いので、かん水、その他の管理にも細心の注意をはらうことが重要である。

(4) さしつけ用土は鹿沼土が最良である。

(5) 越冬についてはロードスホワイトおよびジャンマリードモンターグなどは耐寒温度0℃となっているので、伏臥等の方法により、雪中越冬をしなければならない。

## その他の増殖法

### 空 中 取 木

昭和40年6月15日および昭和43年7月に試みたが、前者は9月24日の調査結果では発根率30%で、その状況は、3～5cm程度の根が4～5本の発生にとどまり、いずれも環状剥皮部枝先側の皮部切口から発生していた。親木より切り取り移植できる状態ではなかった。後者においても同様な状態であった。

### 葉 さ し

葉さしについても昭和40年4月20日におこなった。さしつけ後195日目まで100%発根している

が、2～3cm 程度の細い毛で、カルスから発根し、その後芯の立ちあがったものはなく、繁殖用には不適であることがわかった。

## 病 虫 害

### (1) 今までにた病害

#### i) 斑点病

毎年2～3回発生している。葉の両面に褐色の斑点を生ずる。一般に病斑は不整形で、先端または葉縁を中心に拡大する。

防除法 病葉はつとめて切りとって焼却する。徴候があらわれたとき、有機水銀剤を散布して病気を防除することができた。予防には月1～2回ボルドー液を散布した。

### (2) 害虫

#### i) ツツジノゲンバウムシ

防除法 マラソン乳剤の散布により防除できた。

#### ii) ハダニ

小型濃赤色のものと透明なものが着生した。

防除法 ネオサップラン、フェンカプトンの散布で防除できた。

#### iii) アブラムシ

防除法 エカチソ500倍液の散布により防除できた。

#### iv) ヒメシロモンドクガ

防除法 ディブデレックスの散布、捕殺などで防除した。

## お わ り に

アメリカ産のシャクナゲの花は美しく、樹性は強健で、生長も早く、栽培は容易である。

北海道の寒さに対しては、積雪を利用することにより、露地で越冬も可能である。アメリカで栽培しているシャクナゲは300品種以上もあり耐寒温度  $-25^{\circ}\text{C}$  のものが17品種もある。それでこれらのなかから樹姿、花、栽培の難易等を検討し、北海道の寒地という特殊性にマッチした品種を選抜し、樹芸樹木用種類の少ない本道に品種の増加につとめるとともに、これらと在来種との育種により、新種の増加につとめていきたい。

( 樹芸樹木科 )